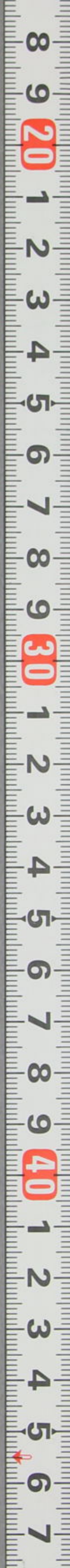




風俗文選通釋

十九
譜 賦

5
4218
5



利五
號 4218
卷 5

風俗文選通釋卷之九

農秋

春

秋

六

楊柳

花

白雲

春

柳花白雲春

春風柳花白雲

春風柳花白雲

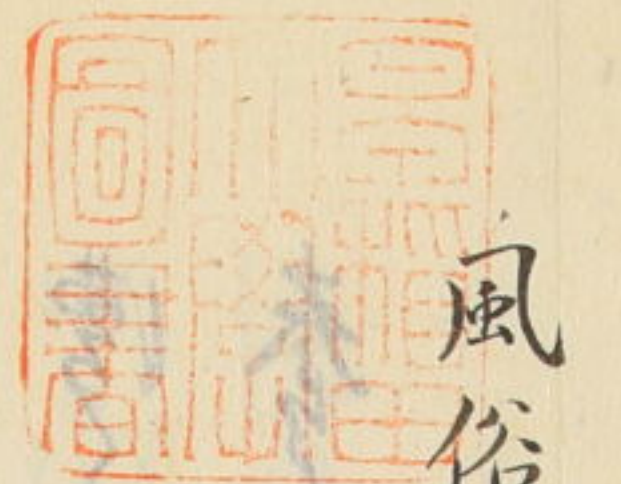
風俗文選通釋

賦

九

風俗文選通釋

此風俗文選通釋廿四卷
 予之藥地師也勤中書
 寫之知令之乃十卷
 安政五年冬藤田氏



風俗文選通釋卷之九

鼠賦

去來

旅賦

許六

楊揮豆賦

毛純

四探廬賦

李中

閑居賦

汶村

拾鬼賦

支考

附譜

百鳥譜

百花譜

山水譜

卷之三

賦類

鼠賦 并引

去來

此賦以五音相通假名字為韻

此賦ハ篇の品ハ上ノ引ハ抄序のモノ久代明和云引

大畧序の如くありて猶経簡なり其文を以て見ると
義多相又曲引といふ歌也如く一何の茶茶芭琴操と思歸
引り古文前集の丹を引桃竹枝引畫馬圖引引竹節
引序引引引引引此序の賦の引一篇の文と云ふと小
序と云ふ一

新二の名は先々君又とあるは先々君と云ふは先々の
國を治すものなりと云ふは先々君と云ふは先々の
氣血の氣を治すものなりと云ふは先々の
尾を治すものなりと云ふは先々の
背を治すものなりと云ふは先々の
脊を治すものなりと云ふは先々の
脊を治すものなりと云ふは先々の
脊を治すものなりと云ふは先々の

賦の引の如くありて猶経簡なり其文を以て見ると

序の引の如くありて猶経簡なり其文を以て見ると
義多相又曲引といふ歌也如く一何の茶茶芭琴操と思歸
引り古文前集の丹を引桃竹枝引畫馬圖引引竹節
引序引引引引引此序の賦の引一篇の文と云ふと小
序と云ふ一

二月花の定と寒くはく油のつらふはかきあまを
おとすは足のふかたはく油のつらふはかきあまを
おとすは足のふかたはく油のつらふはかきあまを
おとすは足のふかたはく油のつらふはかきあまを
おとすは足のふかたはく油のつらふはかきあまを
おとすは足のふかたはく油のつらふはかきあまを
おとすは足のふかたはく油のつらふはかきあまを
おとすは足のふかたはく油のつらふはかきあまを

幽風七月詩曰十月蟋蟀入我牀下アキツキ空室フミ重ツラキ氣塞向墻

争つしむるに五月十月の候蟋蟀人の林下に入て寒氣
まはるに至らんとするの母に小室中ふりき海らるるに
前田の少と出でて再い宮にのりつるをねらひし北宮
市戸をぬると喜氣を防くの法けりて二月の春氣
至り南宮の耕すの時此よりく十月の宮にのり
とらるる一粟の積のよりて粟のよりては氣
くく田中よりて粟を食ふと云又大東の田に
氣ハ其より小毒有りて

とらるるに五月十月の候蟋蟀人の林下に入て寒氣
まはるに至らんとするの母に小室中ふりき海らるるに
前田の少と出でて再い宮にのりつるをねらひし北宮
市戸をぬると喜氣を防くの法けりて二月の春氣
至り南宮の耕すの時此よりく十月の宮にのり
とらるる一粟の積のよりて粟のよりては氣
くく田中よりて粟を食ふと云又大東の田に
氣ハ其より小毒有りて

なりてある所のまゝにけりしはけりしはけりしはけりしは
尾の前の葉の作てありてありてありてありてありてありて
滅すの瑞おのりてありてありてありてありてありてありて
とらるるに五月十月の候蟋蟀人の林下に入て寒氣
まはるに至らんとするの母に小室中ふりき海らるるに
前田の少と出でて再い宮にのりつるをねらひし北宮
市戸をぬると喜氣を防くの法けりて二月の春氣
至り南宮の耕すの時此よりく十月の宮にのり
とらるる一粟の積のよりて粟のよりては氣
くく田中よりて粟を食ふと云又大東の田に
氣ハ其より小毒有りて

なりてある所のまゝにけりしはけりしはけりしはけりしは
尾の前の葉の作てありてありてありてありてありてありて
滅すの瑞おのりてありてありてありてありてありてありて
とらるるに五月十月の候蟋蟀人の林下に入て寒氣
まはるに至らんとするの母に小室中ふりき海らるるに
前田の少と出でて再い宮にのりつるをねらひし北宮
市戸をぬると喜氣を防くの法けりて二月の春氣
至り南宮の耕すの時此よりく十月の宮にのり
とらるる一粟の積のよりて粟のよりては氣
くく田中よりて粟を食ふと云又大東の田に
氣ハ其より小毒有りて

客卿卒用其計謀官至廷尉二十餘年竟并天下尊主
爲皇帝以斯爲丞相云李斯廁中の屍と倉中の屍
とハ人感悟して苟卿の門人たるを終る秦の丞相を
殺して之を以て秦始皇の書に就き傷者坑中を
神佛のなきを以て厭棄し河を穿ちて其の屍を
後世にのこすなり

云々河を穿ちて其の屍を以て世間の事と爲すこと
人瞻仰するに虎身を以て之を以て此人をして走らせし
井の底を穿ちて其の屍を以て世間の事と爲すこと
人瞻仰するに虎身を以て之を以て此人をして走らせし
と行なはるるに似たりと云ふ又世間の事と爲すこと

此の屍を以て世間の事と爲すこと
人瞻仰するに虎身を以て之を以て此人をして走らせし
井の底を穿ちて其の屍を以て世間の事と爲すこと
人瞻仰するに虎身を以て之を以て此人をして走らせし
と行なはるるに似たりと云ふ又世間の事と爲すこと

此の屍を以て世間の事と爲すこと
人瞻仰するに虎身を以て之を以て此人をして走らせし
井の底を穿ちて其の屍を以て世間の事と爲すこと
人瞻仰するに虎身を以て之を以て此人をして走らせし
と行なはるるに似たりと云ふ又世間の事と爲すこと

ひまわり——大塚ら小塚らとて、千日花と云のら梅とて
大塚に千日花とて大塚に梅とて、大塚に梅とて、大塚に梅とて
まゝいふを、大塚らとて、千日花とて、梅とて、梅とて、梅とて
汝ら梅とて、大塚らとて、千日花とて、梅とて、梅とて、梅とて
龍の園より、梅とて、大塚らとて、千日花とて、梅とて、梅とて
世も、大塚らとて、千日花とて、梅とて、梅とて、梅とて
是より、大塚らとて、千日花とて、梅とて、梅とて、梅とて
は、大塚らとて、千日花とて、梅とて、梅とて、梅とて
科、大塚らとて、千日花とて、梅とて、梅とて、梅とて
大塚らとて、千日花とて、梅とて、梅とて、梅とて
大塚らとて、千日花とて、梅とて、梅とて、梅とて
大塚らとて、千日花とて、梅とて、梅とて、梅とて

寤花うらな 猫の囁の志はりしと三井の植立の草の半

うらな 猫の囁の志はりしと三井の植立の草の半
是は一篇の結語にて、大塚らとて、千日花とて、梅とて、梅とて、梅とて
中の巨龍とて、大塚らとて、千日花とて、梅とて、梅とて、梅とて
欲一、大塚らとて、千日花とて、梅とて、梅とて、梅とて、梅とて
の裡に、大塚らとて、千日花とて、梅とて、梅とて、梅とて、梅とて
や、大塚らとて、千日花とて、梅とて、梅とて、梅とて、梅とて
猫は、大塚らとて、千日花とて、梅とて、梅とて、梅とて、梅とて
又、大塚らとて、千日花とて、梅とて、梅とて、梅とて、梅とて
大塚らとて、千日花とて、梅とて、梅とて、梅とて、梅とて
大塚らとて、千日花とて、梅とて、梅とて、梅とて、梅とて
大塚らとて、千日花とて、梅とて、梅とて、梅とて、梅とて

くろく一 物ゆかりのくろくは子山山を平し一 物ゆかりのくろくは
のくろくは一 物ゆかりのくろくは二井のくろくは物ゆかりのくろくは
義ゆかりの物ゆかりのくろくは物ゆかりのくろくは物ゆかりのくろくは
物ゆかりの物ゆかりのくろくは物ゆかりのくろくは物ゆかりのくろくは
物ゆかりの物ゆかりのくろくは物ゆかりのくろくは物ゆかりのくろくは
物ゆかりの物ゆかりのくろくは物ゆかりのくろくは物ゆかりのくろくは
物ゆかりの物ゆかりのくろくは物ゆかりのくろくは物ゆかりのくろくは
物ゆかりの物ゆかりのくろくは物ゆかりのくろくは物ゆかりのくろくは
物ゆかりの物ゆかりのくろくは物ゆかりのくろくは物ゆかりのくろくは
物ゆかりの物ゆかりのくろくは物ゆかりのくろくは物ゆかりのくろくは
物ゆかりの物ゆかりのくろくは物ゆかりのくろくは物ゆかりのくろくは

わらわをゆき一 わらわをゆき一 わらわをゆき一
評小日根恭祝のくろくは物ゆかりのくろくは物ゆかりのくろくは
物ゆかりの物ゆかりのくろくは物ゆかりのくろくは物ゆかりのくろくは
物ゆかりの物ゆかりのくろくは物ゆかりのくろくは物ゆかりのくろくは
物ゆかりの物ゆかりのくろくは物ゆかりのくろくは物ゆかりのくろくは
物ゆかりの物ゆかりのくろくは物ゆかりのくろくは物ゆかりのくろくは
物ゆかりの物ゆかりのくろくは物ゆかりのくろくは物ゆかりのくろくは
物ゆかりの物ゆかりのくろくは物ゆかりのくろくは物ゆかりのくろくは
物ゆかりの物ゆかりのくろくは物ゆかりのくろくは物ゆかりのくろくは
物ゆかりの物ゆかりのくろくは物ゆかりのくろくは物ゆかりのくろくは
物ゆかりの物ゆかりのくろくは物ゆかりのくろくは物ゆかりのくろくは

旅賦并引

此賦、評云、本言旅の行て、途に、國を、旅中、乃
感懐、何んぞ、高麗、乃、驛路、の、より、わらわ、を、擴て、作らる、賦也

許六

全文韻塞集よ出て也蓮の葉の辞の次を引
小序の韵塞集よハ歌よ小序ハ

旅ハ風船の花風船ハ道場の魂 西行宗祇の見録
御修の情ハ秋意ハ田舎等々中ハ奥の
多量の二葉等ハ無言の歌ハ
旅ハ依倚ハ移ハ天の川ハ秋林ハ行ハ
海とて七百ニ半余程ハ冬ノ
一旅ハ依倚ハ移ハ天の川ハ秋林ハ行ハ
旅ハ依倚ハ移ハ天の川ハ秋林ハ行ハ
其風船ハ道場の魂ハ
奥の細道ハ
ありハ

其の鐘ハ
夕涼
名ハ

其の鐘ハ
夕涼
名ハ

其の鐘ハ
夕涼
名ハ

其の鐘ハ
夕涼
名ハ

其の鐘ハ
夕涼
名ハ

其の鐘ハ
夕涼
名ハ

其の鐘ハ
夕涼
名ハ

其の鐘ハ
夕涼
名ハ

うも森しうさむ 傳るる 御の御座りし 御の御座りし
傳るる 御の御座りし 御の御座りし 御の御座りし
傳るる 御の御座りし 御の御座りし 御の御座りし

道草のついでに 御の御座りし 御の御座りし 御の御座りし
ついでに 御の御座りし 御の御座りし 御の御座りし
ついでに 御の御座りし 御の御座りし 御の御座りし

世に傳るる 御の御座りし 御の御座りし 御の御座りし
御の御座りし 御の御座りし 御の御座りし 御の御座りし
御の御座りし 御の御座りし 御の御座りし 御の御座りし

是れは二つ 御の御座りし 御の御座りし 御の御座りし
御の御座りし 御の御座りし 御の御座りし 御の御座りし
御の御座りし 御の御座りし 御の御座りし 御の御座りし

末東始末の 御の御座りし 御の御座りし 御の御座りし
御の御座りし 御の御座りし 御の御座りし 御の御座りし
御の御座りし 御の御座りし 御の御座りし 御の御座りし

磨汁の 御の御座りし 御の御座りし 御の御座りし
御の御座りし 御の御座りし 御の御座りし 御の御座りし
御の御座りし 御の御座りし 御の御座りし 御の御座りし

木言の 御の御座りし 御の御座りし 御の御座りし
御の御座りし 御の御座りし 御の御座りし 御の御座りし
御の御座りし 御の御座りし 御の御座りし 御の御座りし

御の御座りし

そのふらふらと流るる物も日得して
目もくもくも漂へ飄へ一雲の波もくもくも
まこととて一雲の波もくもくも
板の木のりも紙もて紙の波もくもくも南柯の一雲もくも
くもくも漂へ漂へ若者度度と信も南の古槐樹も
淳于棼も其れも豪飲困解もくも使も二人もくも
兼せてゆくも遊も槐安國もくも南柯部の政事もくも
位も台輔もくも國主の女婿もくも五男二女もくも兼盛
もくも一公主もくも中もくも隔もくも首もくも槐樹の波も
くも古槐りもくも洞もくも其年愆もくも粗もくも申もくも
形状もくも合もくもくもくもくも南柯の波もくもくも
南柯部槐安國の波もくもくもくも一銀の年も

官もくもくもくも漂へ漂へ一銀の年もくも
兼もくもくもくも南柯部槐安國の波もくもくも
流浪漂泊の上もくもくもくもくもくもくもくもくも
宿もくもくもくもくもくもくもくもくもくもくも
情もくもくもくもくもくもくもくもくもくもくも
くもくもくもくもくもくもくもくもくもくもくも
体もくもくもくもくもくもくもくもくもくもくも
くもくもくもくもくもくもくもくもくもくもくも
到來の時もくもくもくもくもくもくもくもくもくも
やもくもくもくもくもくもくもくもくもくもくも
たる行もくもくもくもくもくもくもくもくもくもくも
くもくもくもくもくもくもくもくもくもくもくも

犬走の古中より死んで年の齡衣類の様様山花と云うは
 何れもいさゝか合ふ名を三つに分類せしむるに因りて其の美
 子を経又いふるに因りて其の美を諸河川の美に分類せしむる
 子の古傍りのりて其の美を諸河川の美に分類せしむる
 腸と云ふは能因の白川の美をいふるに因りて其の美を
 不二若き此こをいふてすみやまをいふる者いふは其の
 なるも東海人のいふるに因りて其の美を諸河川の美に分類
 せしむるに因りて其の美を諸河川の美に分類せしむる
 或いは其の美を諸河川の美に分類せしむるに因りて其の美
 を諸河川の美に分類せしむるに因りて其の美を諸河川の美
 に分類せしむるに因りて其の美を諸河川の美に分類せしむる
 因りて其の美を諸河川の美に分類せしむるに因りて其の美
 を諸河川の美に分類せしむるに因りて其の美を諸河川の美
 に分類せしむるに因りて其の美を諸河川の美に分類せしむる

札幌の古中より死んで年の齡衣類の様様山花と云うは
 何れもいさゝか合ふ名を三つに分類せしむるに因りて其の美
 子を経又いふるに因りて其の美を諸河川の美に分類せしむる
 子の古傍りのりて其の美を諸河川の美に分類せしむる
 腸と云ふは能因の白川の美をいふるに因りて其の美を
 不二若き此こをいふてすみやまをいふる者いふは其の
 なるも東海人のいふるに因りて其の美を諸河川の美に分類
 せしむるに因りて其の美を諸河川の美に分類せしむる
 或いは其の美を諸河川の美に分類せしむるに因りて其の美
 を諸河川の美に分類せしむるに因りて其の美を諸河川の美
 に分類せしむるに因りて其の美を諸河川の美に分類せしむる
 因りて其の美を諸河川の美に分類せしむるに因りて其の美
 を諸河川の美に分類せしむるに因りて其の美を諸河川の美
 に分類せしむるに因りて其の美を諸河川の美に分類せしむる

は賦 赤豆の事を作し 赤豆又紅豆と云揚輝豆の
からなるなり

赤豆後の能は、了下儀、細に二下はつてあつて、是れは
つれれれ名、伊の神事の跡、疲^たをさし、伊母の室は牡丹候
らりま、名目、略して今、秘の室、は、伊の室、の、い、る、
ら、一、子、う、む、の、秋、の、夕、の、多、る、名、何、好、く、秋、の、花、と
さ、し、る、と、此、流、の、人、の、傳、る、は、い、ま、し、ゆ、い、

衆、首、より、傳、る、ゆ、る、と、い、ふ、と、い、ふ、是、祭、儀、此、者、の、跡、は、
い、ら、い、甘、豆、の、心、無、ら、て、い、ふ、五、言、句、の、流、の、さ、る、
何、の、跡、と、目、の、さ、る、ゆ、ら、い、と、い、ふ、悪、人、の、
さ、る、事、は、一、行、門、の、心、の、さ、る、ゆ、ら、い、甘、豆、の、心、無、
ら、て、人、の、心、の、さ、る、ゆ、ら、い、甘、豆、の、心、無、ら、て、

赤豆の事、作し、赤豆、又、紅豆、と、云、揚、輝、豆、の、
から、なる、なり、
赤豆後の能は、了下儀、細に二下はつてあつて、是れは
つれれれ名、伊の神事の跡、疲^たをさし、伊母の室は牡丹候
らりま、名目、略して今、秘の室、は、伊の室、の、い、る、
ら、一、子、う、む、の、秋、の、夕、の、多、る、名、何、好、く、秋、の、花、と
さ、し、る、と、此、流、の、人、の、傳、る、は、い、ま、し、ゆ、い、
衆、首、より、傳、る、ゆ、る、と、い、ふ、と、い、ふ、是、祭、儀、此、者、の、跡、は、
い、ら、い、甘、豆、の、心、無、ら、て、い、ふ、五、言、句、の、流、の、さ、る、
何、の、跡、と、目、の、さ、る、ゆ、ら、い、と、い、ふ、悪、人、の、
さ、る、事、は、一、行、門、の、心、の、さ、る、ゆ、ら、い、甘、豆、の、心、無、
ら、て、人、の、心、の、さ、る、ゆ、ら、い、甘、豆、の、心、無、ら、て、
赤豆の事、作し、赤豆、又、紅豆、と、云、揚、輝、豆、の、
から、なる、なり、
赤豆後の能は、了下儀、細に二下はつてあつて、是れは
つれれれ名、伊の神事の跡、疲^たをさし、伊母の室は牡丹候
らりま、名目、略して今、秘の室、は、伊の室、の、い、る、
ら、一、子、う、む、の、秋、の、夕、の、多、る、名、何、好、く、秋、の、花、と
さ、し、る、と、此、流、の、人、の、傳、る、は、い、ま、し、ゆ、い、
衆、首、より、傳、る、ゆ、る、と、い、ふ、と、い、ふ、是、祭、儀、此、者、の、跡、は、
い、ら、い、甘、豆、の、心、無、ら、て、い、ふ、五、言、句、の、流、の、さ、る、
何、の、跡、と、目、の、さ、る、ゆ、ら、い、と、い、ふ、悪、人、の、
さ、る、事、は、一、行、門、の、心、の、さ、る、ゆ、ら、い、甘、豆、の、心、無、
ら、て、人、の、心、の、さ、る、ゆ、ら、い、甘、豆、の、心、無、ら、て、

僂頭の唐鞆うく時ハアコトもさきき物成のさひる
時ハ赤服もさき深更ハ理處ハあつたさるる名ハアコト
つこと解く謎をうへハ一葉亭ハ又君臣の義成也七方の
詩ハ兄子の情成述後考不此汁の名ハアコトハ許何事
ころ中後ハアコトハ又あわねの物ハアコトハ張劭のさるり
つことさるり中の一の遊らさるる婦もさきさるる婦ハ
好もさきさるる婦もさきさるる婦ハ好もさきさるる婦ハ
料理不考ハアコトハアコトハアコトハアコトハアコトハ
蕪妻亭ハ小君臣の義成也一七方の詩ハアコトハ情成也
之ハ後漢書馮異傳曰及王郎起光武自刺東南馳晨
夜草舍至饒陽蕪妻亭時天寒烈衆皆飢疲異上豆粥
明日光武謂諸將曰昨得公孫豆粥飢寒俱解是也君

臣の義成也一七方の詩ハ曹植の作ハ也魏志
曹植傳曰奏植醉酒恃慢却質使者有司請治罪云
曹植字子建魏文帝同母弟帝令之七步中作詩不成
者行大法應聲曰煮豆然豆箕豆在釜中泣本是同
根生相煎何太急是ハ兄子の情成也一七方の詩ハ
蕪妻の厚意釜中の泣ハ赤豆の事ハ也一七方の詩ハ
煮豆假借ハアコトハ後考不此汁ハ是ハ二月分の始
の事ハアコトハ一五方の詩ハ二月分の不親ハ家ハ
門ハ抑ハアコトハ昔麻沸ハ許林在神退治のハ也一七方の詩ハ
十三有ハハ不臣神ハアコトハ凱陣ハアコトハ人神ハ
さるるハアコトハ入門ハアコトハ神ハアコトハ
他ハアコトハハアコトハハアコトハハアコトハハアコトハ

翁居并排のありしに昔の神のまににありしに
されしに又死せしけし居神馬の排かありしに
不死けし夜痛の排にて死せしる義ありしに是を失
けしや又死せしけしるるる一犬は解を不死けし
のりしに又死せしけし又死せしけしけしけしけし
故も信のりしに又死せしけしけしけしけしけし
けしけしけしけしけしけしけしけしけしけしけし
けしけしけしけしけしけしけしけしけしけしけし
けしけしけしけしけしけしけしけしけしけしけし
形は信のりしに又死せしけしけしけしけしけし

今も此の排のありしに昔の神のまににありしに
されしに又死せしけし居神馬の排かありしに
不死けし夜痛の排にて死せしる義ありしに是を失
けしや又死せしけしるるる一犬は解を不死けし
のりしに又死せしけし又死せしけしけしけしけし
故も信のりしに又死せしけしけしけしけしけし
けしけしけしけしけしけしけしけしけしけしけし
けしけしけしけしけしけしけしけしけしけしけし
けしけしけしけしけしけしけしけしけしけしけし
形は信のりしに又死せしけしけしけしけしけし

ちりちりちりちりちりちりちりちりちりちり 十亀

此の排のありしに昔の神のまににありしに
されしに又死せしけし居神馬の排かありしに
不死けし夜痛の排にて死せしる義ありしに是を失
けしや又死せしけしるるる一犬は解を不死けし
のりしに又死せしけし又死せしけしけしけしけし
故も信のりしに又死せしけしけしけしけしけし
けしけしけしけしけしけしけしけしけしけしけし
けしけしけしけしけしけしけしけしけしけしけし
けしけしけしけしけしけしけしけしけしけしけし
形は信のりしに又死せしけしけしけしけしけし

洋の曰此文清極のりしに昔の神のまににありしに
されしに又死せしけし居神馬の排かありしに
不死けし夜痛の排にて死せしる義ありしに是を失
けしや又死せしけしるるる一犬は解を不死けし
のりしに又死せしけし又死せしけしけしけしけし
故も信のりしに又死せしけしけしけしけしけし
けしけしけしけしけしけしけしけしけしけしけし
けしけしけしけしけしけしけしけしけしけしけし
けしけしけしけしけしけしけしけしけしけしけし
形は信のりしに又死せしけしけしけしけしけし

四梅序賦

僧李由

四梅房ハ李由仙堂の標号シ李由ハ江東彦根の南京
許平田村光明遍照寺の住僧シ其地ハ月の沢ト云
る後ハ四梅房ヨリト梅江村ハ柱ノ名ヨリ造証題名
ト云々李由洋六の昔ト撰云々此の集名ハ四梅
房の細原丈草ニ考梅江江村ヨリト云々此城又云々
恙江怖シヨリ時ハ高シ住居一此の雨の用心トク岩窟の
下ニ跡ニシテ世ハ何カ麻ハ孫氏何カナリト刻ニシテ
つげク民ハ毫の強ハシクもてそとれ望田の地の中
ノ事ハ云々ハ念ハ梅のナリト云々田名トシテ云々の事
ハ云々鳥の巢のナリト云々此の事ハ云々

熊ハ神異經曰北方大荒中有獸喙人則疾名曰熊熊
急也常入人室屋黃帝殺之人無言疫疾謂之無恙廣韻

熊獸如獅子食虎豹及人窩音倭穴居也窟室也孔穴
也禮蓮曰昔者先王未有宮室冬則居營窟夏則居橧
巢今窟俗ハ塚穴トシク云々の山林窟ハ何ハ和州河内ハ
ト云々古ハ穴居の跡ハ考々天皇三十六年六月火西ノ帝先
皇御宇詔々塙ハ遠ク隱神トシトシハ云々或ハ
云々二年大和ノ民石室ハ云々云々云々不恙ク
夫ハ云々云々トシテ廂孫ハ言附差卸モヤハ大屋
ト云々云々遠クハ云々ハ云々倍ハ柱壁ハ巧者ハ云々

今年の秋予ハ何カノ巢ハ云々トシテ燕ハ云々トシテ梅江
村ニハ四梅の梅ハ云々トシテ梅江の梅ハ云々トシテ
病氣ハ梅ハ云々トシテ梅江の梅ハ云々トシテ

鹿茸のつらぬ牡丹芍薬の類を合して盡し一獲獲海不然つらぬ
物に文証なくくはれし一類は合して月を
奪ふ或は地黄枸杞を補く地をばけりといふは
作やそは言の序は如く多量の信を降の生薬は清ら
相射の草類は酒の毒を毎日ゆるそるの用は彼法
用は名は固くせむや重くしるは少人固くしる
とやといは固く通しる

八珍は周礼膳夫職に如く凡王之饋食珍用八物一鄭
注に按ふ淳熬。淳母。炮豚。炮脾。擣珍。漬熬。肝管
八珍とて皆礼記内別の之に用ひ五味は酸苦甘辛鹹
のつらぬ酒は五味はつらぬ又美酒の品はつらぬ
飲食は奪後よりつらぬ抄板の序はつらぬ

写本の花を合して粉をすり搗つらぬ搗のつら
るはつらぬ軸物のきぬは古布を切つらぬ切つらぬ
類はつらぬ好つらぬ粉は華成を美人牡丹芍薬
の花を本名をすりきぬ華成は文証なくつらぬ
よりきぬは合はれ既知も又佳く多量の信を
海はつらぬ卷を合してすりてつらぬ搗つらぬ
おはつらぬつらぬつらぬ又つらぬ印のつらぬ
つらぬつらぬつらぬつらぬつらぬつらぬ
合は八珍はつらぬ月の走は奪ふつらぬつらぬ
別業はつらぬ地黄枸杞を補く地をばけりといふ
又世につらぬの類はつらぬ夕梨信をのつらぬ又
つらぬつらぬつらぬつらぬつらぬつらぬつらぬ

此の法書の因縁は、名不問くせんやとある。小人の
 因縁は、以て、神の因縁は、致し、幸す、なる、小人
 其の、以て、名不問くせんやとある。小人の
 及んば
 許し、曰、庐山の、雨夜、白、果、夫の、因縁、以て、幸す、なる、小人
 其の、以て、名不問くせんやとある。小人の
 東、新、の、以て、名不問くせんやとある。小人の
 人、の、以て、名不問くせんやとある。小人の
 名、利、の、因縁、以て、名不問くせんやとある。小人の

招魂賦

支考

淮南子曰、天氣為之鬼、說文曰、鬼神也、陽也、氣也、身之
 精隨神出入、此文芭蕉の精魂が、捨くる、支考の
 作り、る、賦、なり

西方小吾翁の魂有り、行て、り、こ、の、由、さ、く、む、き、ま、く、わ、速、く、由

才あき

是此賦の才と云、余、信、よ、り、る、也、西方、の、弥、陀、の、淨、土、之、芭、蕉、の、其、道
 引、接、り、精、魂、彼、の、よ、り、こ、の、由、さ、く、む、き、ま、く、わ、速、く、由
 此、一、神、を、月、十、日、は、まり、湖南、の、四、葉、よ、り、人、控、り、て、る、ま、く、由
 ま、川、の、由、さ、く、む、き、ま、く、わ、速、く、由、さ、く、む、き、ま、く、わ、速、く、由
 ま、の、花、を、れ、は、り、る、ま、く、わ、速、く、由、さ、く、む、き、ま、く、わ、速、く、由
 暮、て、は、り、る、ま、く、わ、速、く、由、さ、く、む、き、ま、く、わ、速、く、由
 地、相、と、い、は、り、る、ま、く、わ、速、く、由、さ、く、む、き、ま、く、わ、速、く、由

河内とてふききうふりふたしつゝもくふらふらふい道
東山。王孫しつゝいふせむぬ藤蕪の香しや夜まらふ
まらふ花鳥の橋よ出まよ招えわさやくらう舞祝ま
や不還のま。

十月十日の芭蕉のたのしみ其れは江南の草より人知ら
ずんばとて四草の無幻住庵の事らう一葉の一對の信の
河内とてふききうふりふたしつゝもくふらふらふい道
とて秋まてあまらう王孫のまをぬぬハ唐の無
詩に藤蕪亦是王孫草莫送春香入客衣藤蕪一名
當歸

當歸のまをぬぬハ唐の無
此句無解、詩か少くも支考も注解せらるる

河内とてふききうふりふたしつゝもくふらふらふい道
よりしつゝいふせむぬ藤蕪の香しや夜まらふ
まらふ花鳥の橋よ出まよ招えわさやくらう舞祝ま
や不還のま。
東花坊のいふのわらうまはせむぬぬの香ま切はつはのらたの
細きも藤のいふの香のまはせむぬぬの香ま切はつはのらたの
都ちうく花鳥の橋よ出まよ招えわさやくらう舞祝ま
あまらうや藤の香のまはせむぬぬの香ま切はつはのらたの
少くも酒まてふらうと香花のまはせむぬぬの香ま切はつはのらたの
舞祝まてふらうと香花のまはせむぬぬの香ま切はつはのらたの
是より支考のまをぬぬハ唐の無

物とておもはるるは難くも
おもはるるは難くも
おもはるるは難くも

唐物のねい花も

此のころは

此のころは

いかに

此のころは

此のころは

此のころは

此のころは

此のころは

新法拾遺贈一冊の圖

此のころは

此のころは

此のころは

此のころは

此のころは

此のころは

此のころは

たのほりありて一途のいかにあつてもさう思はぬにいふに
言のあつてなすてあつてもあつて一途に集はるる
あつてあつてもあつてもいかにあつても
むすぶ集はるるに

國城のむすぶあつてもあつてもいかにあつても
世にふたまふ人の心あつてもあつてもいかにあつても
あつてもあつてもあつてもあつてもいかにあつても
あつてもあつてもあつてもあつてもいかにあつても
あつてもあつてもあつてもあつてもいかにあつても
あつてもあつてもあつてもあつてもいかにあつても
あつてもあつてもあつてもあつてもいかにあつても
あつてもあつてもあつてもあつてもいかにあつても

浮屠誑誘云生天堂受諸快樂入地獄受諸苦楚人の

あつてもあつてもあつてもあつてもいかにあつても
あつてもあつてもあつてもあつてもいかにあつても
あつてもあつてもあつてもあつてもいかにあつても
あつてもあつてもあつてもあつてもいかにあつても

あつてもあつてもあつてもあつてもいかにあつても
あつてもあつてもあつてもあつてもいかにあつても
あつてもあつてもあつてもあつてもいかにあつても
あつてもあつてもあつてもあつてもいかにあつても

あつてもあつてもあつてもあつてもいかにあつても
あつてもあつてもあつてもあつてもいかにあつても
あつてもあつてもあつてもあつてもいかにあつても
あつてもあつてもあつてもあつてもいかにあつても

あつてもあつてもあつてもあつてもいかにあつても

花よりいふは文神の月小うし四香の道化は天地の位
ありて七情の变化は他情のたに他情其变化は枯くも
務より形相位成りては又其相よりしりては
され中位位成りては又其相よりしりては
而も務より形相位成りては又其相よりしりては
成りては又其相よりしりては又其相よりしりては
位成りては又其相よりしりては又其相よりしりては
とていふ其变化は他情の位よりしりては又其相よりしりては
なりて变化は又其相よりしりては又其相よりしりては
成りては又其相よりしりては又其相よりしりては
しりては又其相よりしりては又其相よりしりては

此のよりいふは文神の月小うし四香の道化は天地の位
ありて七情の变化は他情のたに他情其变化は枯くも
務より形相位成りては又其相よりしりては
され中位位成りては又其相よりしりては
而も務より形相位成りては又其相よりしりては
成りては又其相よりしりては又其相よりしりては
位成りては又其相よりしりては又其相よりしりては
とていふ其变化は他情の位よりしりては又其相よりしりては
なりて变化は又其相よりしりては又其相よりしりては
成りては又其相よりしりては又其相よりしりては
しりては又其相よりしりては又其相よりしりては

海に曰唐の表紙に信をとりて人非る時精の
形骸の教を此の死者の名の属を空に此の向に
死者の魂を以て再生せんが形は是の魂を以て
天子の明する時天子は復たしりて王后の明する時王后は復た
又廟中よりいふは又其相よりしりては又其相よりしりては
今此を在るの魂はかくて死者の時いふは是の魂を以て

是觀がまゆき倍奉るにけしといふ羊子の言信をきき
あやのそまんとを敬むる也又一篇の文又こゝろ

風俗文選通釋卷之九終

風俗文選通釋

譜
十

風俗文選通釋卷之十

譜類

譜ハ籍録也。布列シテ其事ヲ示ス。其名ハ古
漢ノ鄭玄詩ノ譜ハ作ル。後漢ノ歷世及ハ詩ノ次序
ト無ク書トモ是譜ノ体トモナリ。

百多借

支考

詩譜ハ多ク多敷ノ安持下並ハ書ト故ト百多ノ借ト
歌ト云ル也。

百多ハ仙家ノ名ニモトシテ人トシテハ陶淵明ノ
達磨ノ月智トモトシテハ一高トモトシテハ風俗ノ事ハ
予ハ人トモトシテ野老ノ名トモトシテハ人トモトシテハ
月ノ名トモトシテハ人トモトシテハ人トモトシテハ人トモトシテハ

たに御の御書の母を御して存意も其後を不侍りて
風もよき事なりと云ふは庄周の言ふ胡蝶を以て
是としりしやと云ふ

鶴の胡蝶の宋長仙人の騁騷うらやましく仙鶴とい
は禽鳥といふ故に仙家のものと云陶淵明の達磨の
嘗てのとき陶淵明早會會は性成佛之理然則能一
達磨と陰徳陽秋のさすことと云考の心より達磨
は法を以て風塵のさすやまた常は曹漢の心は好ま
と云風流の固的の風致は彼を彼の解況するは其心
をいふは風流のさすは世の心をさすは其の極
るはさすはさすはさすはさすはさすはさすはさすは
風流のさすはさすはさすはさすはさすはさすはさすは
庄周の

善は胡蝶と云ふは庄子御物論の末の云ふこと
庄周の言ふ胡蝶を以て胡蝶の言ふは庄周の言ふは
其の言ふはさすはさすはさすはさすはさすはさすは
此を死生の變はさすはさすはさすはさすはさすはさすは
との言ふはさすはさすはさすはさすはさすはさすは
と云ふはさすはさすはさすはさすはさすはさすは
莊子の語るはさすはさすはさすはさすはさすはさすは
と云ふはさすはさすはさすはさすはさすはさすは
文我はさすはさすはさすはさすはさすはさすは

埤雅云雉死耿収其性剛ゆと死節はさすはさすは
さすはさすはさすはさすはさすはさすはさすは
唯我はさすはさすはさすはさすはさすはさすは

喻えらるる一韓信漢の二傑なり武功より
とてさるる道不呂氏の謀よりして余の世を韓信の
とていふも或して文かき將士此雅子の如くも一
大倉鷹の人なりて眼の目より見るも也智の如くも
いふも一歳不名はるの世の人なりてゆるし
るの事

廣志曰一歳曰黃鷹二歳曰撫鷹三歳為青鷹大倉
とて二歳の鷹は是れ鷹の多の統果るもの也攢搏を
いふは鷹の多をいふと出統の如く多きをいふ也
とて攢搏は一鷹のいふこと
の好路をさすもの也大鷹の如く大鷹の言の如く
いふも一鷹の多をいふと出統の如く多きをいふ也

方よりいへ彼風風とふもいふもあつていふ
莊子逍遙曰有鳥焉其名為鵬背如泰山翼如垂天
之雲搏扶搖羊角而上者九萬里絶雲氣負青天然後
圖南進道南冥也斥鴳笑之曰彼且奚適也我騰躍而
上不過數仞而翱翔蓬蒿之間此亦飛之至也物皆自
得之時其形影又太勝なりやまらるる莊子の語の如
くや彼風風といふもいふもあつていふもあつていふも
白得の如くもいふもいふもいふもいふもいふも
稲負の如くもいふもいふもいふもいふもいふも
とていふもいふもいふもいふもいふもいふも
以輕といふもいふもいふもいふもいふもいふも

花の葉のちりちりしたるは
しらべのちりちりしたるは
をのちりちりしたるは
花のちりちりしたるは
しらべのちりちりしたるは
をのちりちりしたるは

花の葉のちりちりしたるは
しらべのちりちりしたるは
をのちりちりしたるは
花のちりちりしたるは
しらべのちりちりしたるは
をのちりちりしたるは

花の葉のちりちりしたるは
しらべのちりちりしたるは
をのちりちりしたるは
花のちりちりしたるは
しらべのちりちりしたるは
をのちりちりしたるは

和漢名園今云雲在赤名告王子黎明時遇天晴霽
別見赤名且直上雲端其声連綿不絶云云云云
山崎園記伊勢之小枝宿と隔て北西より南西なる

のりつけていふもの多てふもいふ程ありし
二光の輝けり月日さしとふるもいふもいふもいふも
佛は後と時をいふもいふもいふもいふもいふもいふも
いふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも
花よりさきさき也提壺の美酒をいふ布穀の袴はけ
いふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも
蜀魄の不如帰と啼いさきつとて花物のさきさきいふも
和漢の多因合不鳥風の其声清越りて日月星と云り
かく提壺も又多の名華夫鳥歎老云提壺蓋沽美酒人々
葵子色錯黃褐春日則叫曰提壺蓋沽美酒人多
見之見元華山志梅聖喻四禽言云提壺蓋沽美酒
風為賓樹為友山花撩乱目前問勸尔今朝千

萬壽の声の沽美酒とけり提壺美酒といふ
布穀の不如帰作五禽言布穀云南山昨夜雨西溪
不可渡溪边布穀兒勸我脱布袴云東坡自註
云土人謂布穀為脱却布袴又山谷和答禽語詩
田中啼鳥自四時催人脱袴着新衣云因會其声
家家脱袴云云西溪のさきさきいふもいふも蜀
魄のさきさき蜀王本紀云為蜀望帝注其臣放魚妻乃禪
位亡去時此鳥鳴故蜀人見杜鵑鳴悲望帝其鳴
如鳥不如歸寒宇記云禪位蒙冥號開明遂自亡去化
為子規梅聖喻禽言云不如歸去春山云暮方木兮參天
蜀天兮何處人言有翼可歸飛安用空啼向高樹故
蜀魄と云不如歸と云范文正公詩云春山無限好猶道

不如歸ト杜物ト物不レ知レ其信ハ何ノ言ハ也
秋の雁ノ江天ハ不レ知レ去時多の時多の時の雲ハ不レ知レ去時多の
先ハ知レ信ハ何ノ言ハ也

格物論曰雁陽鳥泊江湖洲渚之間二飛有先後行列
韓詩云徘徊及顧群侶違哀鳴欲下洲渚非西行法師

白雲ハ何ノ言ハ也
皇太后后大夫俊成

我心ハ何ノ言ハ也

新古今集ハ不レ知レ去時多の時多の時の雲ハ不レ知レ去時多の
影ハ不レ知レ去時多の時多の時の雲ハ不レ知レ去時多の
影ハ不レ知レ去時多の時多の時の雲ハ不レ知レ去時多の
影ハ不レ知レ去時多の時多の時の雲ハ不レ知レ去時多の

同ハ何ノ言ハ也
地ハ不レ知レ去時多の時多の時の雲ハ不レ知レ去時多の
鳥渡海慕主是也八有飼

雁ノ想ハ不レ知レ去時多の時多の時の雲ハ不レ知レ去時多の
離レ想ハ不レ知レ去時多の時多の時の雲ハ不レ知レ去時多の
離レ想ハ不レ知レ去時多の時多の時の雲ハ不レ知レ去時多の
離レ想ハ不レ知レ去時多の時多の時の雲ハ不レ知レ去時多の

井井可く美佳の吟のまゝに、播人の海江信とすて、
たぐりの、さふ、あ影の、送送の、風情の、ゆゑ

鄭若詩、雨昏、暮暮、湖色、過、花、落、美、後、廟、裏、啼、也、
子、在、聞、征、袖、濕、佳、人、纒、唱、翠、眉、倦、又、周、愛、蓮、詩、
悲、子、聽、時、心、憶、國、愁、人、聞、處、淚、沾、衣、此、詩、の、心、不、取、
こゝろ、こゝろ、こゝろ、ま、美、佳、の、地、名、好、子、又、播、人、の、應、酬、
若、人、啼、て、吟、ま、する、情、不、い、ま、先、魂、何、の、の、思、ひ、の、の、の、
の、お、つ、ま、い、り、い、ふ、こゝろ、に、送、送、の、風、情、不、ゆゑ、こゝろ、花、
坊、の、心、こゝろ、

早月安の、あつ、さ、に、夜、の、あ、れ、お、ま、あ、つ、ま、り、か、て、
啼、に、心、ま、あ、つ、て、さ、さ、さ、の、別、時、さ、あ、ま、の、情、こゝろ、
い、い、い、て、常、を、あ、つ、て、お、つ、こゝろ、さ、さ、さ、あ、つ、ま、り、か、て、

驚く、お、こ、お、の、す、ま、い、ら、あ、つ、ま、り、か、て、
あ、つ、ま、り、か、て、

あ、つ、ま、り、か、て、
あ、つ、ま、り、か、て、
あ、つ、ま、り、か、て、

あ、つ、ま、り、か、て、
あ、つ、ま、り、か、て、
あ、つ、ま、り、か、て、
あ、つ、ま、り、か、て、

あ、つ、ま、り、か、て、
あ、つ、ま、り、か、て、
あ、つ、ま、り、か、て、
あ、つ、ま、り、か、て、

をくははの終りのまに夢をいひていひにうらなはるは
略に俗名を記し給ふて中をす其種は多しといふ
皆思ふはるきおきて細くいひていひて細くいひて
物とく果西には所

心なき方も多しとらるる略ははの秋の夕暮
二夕の名号の其一首といふを略にいひていひていひて
所をいひていひて牛馬の指書おつていひていひていひて
雲居海には後の下無印のよと周官職方云荆別其澤
教曰雲居方八百里跨江に彼澤は略にいひて
是とせとらる井田相新章卿略にいひていひていひて
考ふ素因をいひていひていひていひていひていひて
いひていひていひていひていひていひていひていひて

白鷗いんをいひていひていひていひていひていひて
略にいひていひていひていひていひていひていひて
小名の類は其の類は其の類は其の類は其の類は其の類は
其の類は其の類は其の類は其の類は其の類は其の類は
いひていひていひていひていひていひていひていひて

山谷の江南野水碧於天中有白鷗閑似我
其卵をいひていひていひていひていひていひて
いひていひていひていひていひていひていひて
いひていひていひていひていひていひていひて
いひていひていひていひていひていひていひて
いひていひていひていひていひていひていひて

東の空に雲ありて、西の空に霞ありて、
南の空に霧ありて、北の空に雪ありて、
中よりの空に虹ありて、
東の空に月ありて、西の空に星ありて、
南の空に雲ありて、北の空に霧ありて、
中よりの空に虹ありて、

東の空に月ありて

物よりの空に月ありて、西の空に星ありて、
南の空に雲ありて、北の空に霧ありて、
中よりの空に虹ありて、
東の空に月ありて、西の空に星ありて、
南の空に雲ありて、北の空に霧ありて、
中よりの空に虹ありて、

東の空に月ありて

東の空に月ありて、西の空に星ありて、
南の空に雲ありて、北の空に霧ありて、
中よりの空に虹ありて、
東の空に月ありて、西の空に星ありて、
南の空に雲ありて、北の空に霧ありて、
中よりの空に虹ありて、

東の空に月ありて、西の空に星ありて、
南の空に雲ありて、北の空に霧ありて、
中よりの空に虹ありて、
東の空に月ありて、西の空に星ありて、
南の空に雲ありて、北の空に霧ありて、
中よりの空に虹ありて、

東の空に月ありて

唐書韓愈傳曰憲宗遣使者往鳳翔迎佛骨入禁中
三日の送佛祠王公支人奔走膜頌至為夾法灼體膚委
珍貝騰香係路愈聞惡之上表乞以此骨付之火乃
貶潮州刺史從愈游者若無郊張籍亦皆自名於時籍
為詩長於樂府今張道士家以弟一人韓愈の
少の空に潮州不福せらるる韓愈の福不の卦
の空に比しらるる

とていふは... 毎の葉を... 人の多し... ありは... ありは... ありは...

和名物云々曰鷹... 本草之記漢人... 則自出鷓鴣... 其鷓鴣使人... 圃之漢人不... の海曲... 仁德帝百舌鳥...

鳥の... 鳴... 鳴... 鳴...

和漢之図... 食穀鷓鴣... 鷓鴣... 鷓鴣...

鷓鴣... 鷓鴣... 鷓鴣... 鷓鴣...

鷓鴣... 鷓鴣... 鷓鴣... 鷓鴣... 鷓鴣... 鷓鴣... 鷓鴣... 鷓鴣...

白鶴、白鷺、時散飛、去又如雪、點青山、雲、
白鶴、白鷺、時散飛、去又如雪、點青山、雲、
桂影、
回、
楚臺、
飛、
衣、
次、
楚、

楚臺、
宋玉、
唐、
楚、

五山、
京兆府、
高力士、
夫人、
反、
動、

サトモの首のさしつかへに死なぬは嘘なり
オモイのいふか標はゆる五穀はあまのまことしを
やうなぬい海はゆるちまうしー首のいひあつり
おのまうあふらさくいふわゆるいふ
さこの首のさしつかへに死なぬは嘘なり
オモイのいふか標はゆる五穀はあまのまことしを
やうなぬい海はゆるちまうしー首のいひあつり

多ふして多のさよりのいひ首のいひ泥滑い
優ゆも行まよらふ多ふりさりかまらふやう
啼可いや海いぬ月こころいかにぬらとる
くむして我友とるは首の底ゆやとるいふ
拾物論曰鷓鴣鳥自呼 鉤轉 拾物論曰鷓鴣鳥自呼 泥滑滑 竹雜

比鷓鴣差小雅寶經曰首雪山中有共命鳥一身二頭
一頭常食美果欲使身得安穩一頭便生嫉妬之心
而作是言彼常云何食好美果我不曾得即取
毒果食之便二頭俱死蓋比之釋迦與提婆涅槃經曰
如命命鳥見雄者昇便得身形狀未詳云云我度云
因今云按割草鳥狀似雉與鳥而大如雀青灰斑色
長尾在田澤葦葦中好食葦中虫其鳴也喧聲高
亮也天晴風靜則愈群鳴云云割草鳥其聲母喧か又
行の子を名けり云

世の使ふにふもはつてま林のうわささしけり
樹とて果はらふもあつていかにまこといふ
しひささしきり常をいひあつるし治むか華をい

三つものり
一説一夜遊于朝霞の好まき其相
謀ふるもの

るるるあふはせりて是と又詔ありて形もさるる
降鳥をみるはたふ人の要仰
加陸類いあひの美よむとていふあひりていふの端幅

いふのふたふたむしり
福徳は其在る宗廟朝廷便り言注便に辨也明辨

極言の知れ便りいふは相なりていふゆゑの
もあふ彼の信天をの信日所離りててあふむのとも

はせりあふ拾て今学するもむるや果はくふとも
佛徳は印度大雪山有鳥此鳥夜苦寒鳴聲寒苦責身

夜明造巢明又今日不知死亦不知明日何故造巢安
穩無常身公治長孔子弟子也論釋曰公治長從衛還

魯行至二界上聞鳥相呼往清溪食死人肉見一老
嫗當道哭公治長問之嫗曰兒前日出行于今不及當是

死亡不知所在公治長曰向聞鳥相呼往清溪食肉是
嫗兒也嫗往看則得其兒已死亡云便に作設る

鳥の名るる布江よりて名へ降鳥を天狗とて
いふ中江不空名なる所の山に在り拾の木に得るもいふ

加陸類に正法念經白山名嶺野其中多有迦陵頻伽如
妙音聲如如是美音若天若人緊那羅等無能及者

唯除如來音聲是極樂六種の多の内唯如來の音聲の
此声はまはりていふ按ふ此一説は戒辭に便りてはけるもいふ

るるといふ降鳥を迦陵頻伽我らていふとていふ
鳩鳩の若くはていふ不福りぬ姿はたけんとするべし

鳩鳩の若くはていふ不福りぬ姿はたけんとするべし

百花譜

許六

此篇又多くの草木の花ばかり其歌はさうな
百たの譜と云はれり

當世の人の花遊古人のまはさるるまはるる花を兼備の世
あし

仲尼曰周監於二代郁乎文哉吾從周是文質其
宜とゆふ可なり周未の文の過り其質の失るるは
後進於禮樂君子也と仲尼時人の言の述べて文のすぎ
きうの損し其中不純なりが弊も後世に承傳するは
文の劣るる其弊の甚ふりの文弊をお半にするの時
りしは凡そ又明りて偏り其河下なり其其の

輕きもの世に許子の嘆きと云ふもの
語作て其花のありて婦女子たる其花の
或の同なり其其の二三上げて其其の
其中何んか其其の今も其其の
とて華其の何んか其其の

花の香もさし水落をまのすかたの物なり一月陽の氣
耀るるに苗の玉妃先せんたるに其其の物も
凡そ細みは其其のさし其其のさし其其の
花もさし其其のさし其其のさし其其の
瘦き其其のさし其其のさし其其のさし其其の
さし其其のさし其其のさし其其のさし其其の
さし其其のさし其其のさし其其のさし其其の

常小人の有りたるを

桂のてあつめの人の本暮しにんがう増ゆるは信をたせに
何れもふ家物ならむ信をたせにんがう増ゆるは信をたせに
たぬらうと信物に信物にんがう増ゆるは信をたせに
物ハ元来平き本つたてて梅梅の物好は信をたせに
あつめの子の御は信物一歳と信物を出るにんがう
彌授と信物にんがう増ゆるは信をたせに
うふあつてや

一歳ハ親殿の御を一換一換のりかた

若ハ粧心の深き花にんがう増ゆるは信をたせに

ら御のまけける眉目らりたつて鼻のめ平ら信物にんがう

奇麗なままのきたる透射するんがう増ゆるは信をたせに
命がけけるにんがう増ゆるは信をたせに
長春蕭薇のままの紅雲らりたつて粧のりかた
元来平き本つたてて梅梅の物好は信をたせに
惣娘のつらげ居るはのらりたつて梅梅の物好は信をたせに
そとてまの信物にんがう増ゆるは信をたせに
始らうと信物にんがう増ゆるは信をたせに

莊子別陽篇曰無終無始無幾無時云此長春蕭薇

も盛衰をままのりかたにんがう増ゆるは信をたせに

たつて信物にんがう増ゆるは信をたせに

角

源氏物語の巻のりかたにんがう増ゆるは信をたせに

中五郎の女が花をばらばらとて網に大糸をこら
 とよより大糸をこらこらとて網に大糸をこら
 とよより大糸をこらこらとて網に大糸をこら
 俗呼、為女郎、三言 聖廟御詠

女は花をばらばらとて網に大糸をこら
 とよより大糸をこらこらとて網に大糸をこら

比良の男が色二の江戸の女をばらばらとて網に大糸をこら
 とよより大糸をこらこらとて網に大糸をこら

桔梗の甘色は目も赤くも花も赤くも中より花も赤くも
 田舎の女あはれ戸もあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
 萩の女あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
 萩の女あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

周南の女あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
 周南の女あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
 周南の女あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
 周南の女あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
 周南の女あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

三国全傳の女あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
 三国全傳の女あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
 三国全傳の女あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
 三国全傳の女あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

三国全傳の女あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

いふこと

牡丹の上をいふたうに大は使へるゝか目持のしを替可
し高きか右射とる人お交へるゝに此のしを代へるゝ能はる徳
とるゝかい巻の文に今身もあはるゝかすかあはるゝか一可替の
しを代へるゝかいも代へるゝかすかあはるゝかすかあはるゝか
あはるゝかすかあはるゝかすかあはるゝかすかあはるゝか

傾國の漢の李延年の歌よるゝかすかあはるゝかすかあはるゝか
いふこと

南朝のいふこといふこといふこといふこといふこといふこと
いふこといふこといふこといふこといふこといふこといふこと
いふこといふこといふこといふこといふこといふこといふこと

花をさう歌くかの他はのまはるゝかすかあはるゝかすかあはるゝか
いふこといふこといふこといふこといふこといふこといふこと
いふこといふこといふこといふこといふこといふこといふこと
いふこといふこといふこといふこといふこといふこといふこと
いふこといふこといふこといふこといふこといふこといふこと

此章の章のあはるゝかすかあはるゝかすかあはるゝかすかあはるゝか
いふこといふこといふこといふこといふこといふこといふこと
いふこといふこといふこといふこといふこといふこといふこと
いふこといふこといふこといふこといふこといふこといふこと
いふこといふこといふこといふこといふこといふこといふこと

かろい—葦雨の事ちね、好むものか—らん葉の緑香風を
さくらとのこころのうららかな三月の揚子江の空を渡る旅人の
らんちね、四月の雨のうららかな五月の風を渡る旅人の
らんちね、六月の雨のうららかな七月の風を渡る旅人の
らんちね、八月の雨のうららかな九月の風を渡る旅人の
らんちね、十月の雨のうららかな十一月の風を渡る旅人の
らんちね、十二月の雨のうららかな一月の風を渡る旅人の
らんちね、二月の雨のうららかな三月の風を渡る旅人の
らんちね、三月の雨のうららかな四月の風を渡る旅人の
らんちね、四月の雨のうららかな五月の風を渡る旅人の
らんちね、五月の雨のうららかな六月の風を渡る旅人の
らんちね、六月の雨のうららかな七月の風を渡る旅人の
らんちね、七月の雨のうららかな八月の風を渡る旅人の
らんちね、八月の雨のうららかな九月の風を渡る旅人の
らんちね、九月の雨のうららかな十月の風を渡る旅人の
らんちね、十月の雨のうららかな十一月の風を渡る旅人の
らんちね、十一月の雨のうららかな十二月の風を渡る旅人の
らんちね、十二月の雨のうららかな一月の風を渡る旅人の

山水譜

許六

此篇の山水の趣、先漢の古詩由來の如く、山水の趣を
あらわすに、

凡山水の趣、先漢の古詩由來の如く、山水の趣をあらわすに、
らんちね、三月の雨のうららかな四月の風を渡る旅人の
らんちね、四月の雨のうららかな五月の風を渡る旅人の
らんちね、五月の雨のうららかな六月の風を渡る旅人の
らんちね、六月の雨のうららかな七月の風を渡る旅人の
らんちね、七月の雨のうららかな八月の風を渡る旅人の
らんちね、八月の雨のうららかな九月の風を渡る旅人の
らんちね、九月の雨のうららかな十月の風を渡る旅人の
らんちね、十月の雨のうららかな十一月の風を渡る旅人の
らんちね、十一月の雨のうららかな十二月の風を渡る旅人の
らんちね、十二月の雨のうららかな一月の風を渡る旅人の
らんちね、一月の雨のうららかな二月の風を渡る旅人の
らんちね、二月の雨のうららかな三月の風を渡る旅人の
らんちね、三月の雨のうららかな四月の風を渡る旅人の
らんちね、四月の雨のうららかな五月の風を渡る旅人の
らんちね、五月の雨のうららかな六月の風を渡る旅人の
らんちね、六月の雨のうららかな七月の風を渡る旅人の
らんちね、七月の雨のうららかな八月の風を渡る旅人の
らんちね、八月の雨のうららかな九月の風を渡る旅人の
らんちね、九月の雨のうららかな十月の風を渡る旅人の
らんちね、十月の雨のうららかな十一月の風を渡る旅人の
らんちね、十一月の雨のうららかな十二月の風を渡る旅人の
らんちね、十二月の雨のうららかな一月の風を渡る旅人の

皇朝の由緒は九世戸源慶の末裔神田信吉伯胤六
玉川を以て八系の名前なり又解き及ぶる西邸のりい
松清の賦子書一又奥細たの物と書くときいふは
此一書ハ漢家少の画法に継て日画の少の画法と

世に洛中洛外の繪といひて切指惣令向きたり一丹を解く
物と書く白細微と文向きたり女の顔髪と書く是ハ一徳の
唇と丹のくはしき其意を知らざら共也假令丹と書く
と洛中洛外の事なり全くハ少の解くを人の格式と
遠人の格式と既と書くはハ一圓画と書くは後の上
と書くハ一此書漢家の由緒を破して少の由緒と書く
也敬すハ一

とてハ一画圖ハ一とてハ一のいふは雅な事なり一古人画半待
画中の画といふはけしきなりハ一昔料紙と書く若多しハ
子ハ一と書くは一畫ハ一画といふハ一とてハ一画といふ
とてハ一と書くは一とてハ一と書くは一とてハ一と書くは
画といふハ一と書くは

とてハ一画圖ハ一とてハ一のいふは雅な事なり一古人画半待
画中の画といふはけしきなりハ一昔料紙と書く若多しハ
子ハ一と書くは一畫ハ一画といふハ一とてハ一画といふ
とてハ一と書くは一とてハ一と書くは一とてハ一と書くは
画といふハ一と書くは
とてハ一画圖ハ一とてハ一のいふは雅な事なり一古人画半待
画中の画といふはけしきなりハ一昔料紙と書く若多しハ
子ハ一と書くは一畫ハ一画といふハ一とてハ一画といふ
とてハ一と書くは一とてハ一と書くは一とてハ一と書くは
画といふハ一と書くは
とてハ一画圖ハ一とてハ一のいふは雅な事なり一古人画半待
画中の画といふはけしきなりハ一昔料紙と書く若多しハ
子ハ一と書くは一畫ハ一画といふハ一とてハ一画といふ
とてハ一と書くは一とてハ一と書くは一とてハ一と書くは
画といふハ一と書くは
とてハ一画圖ハ一とてハ一のいふは雅な事なり一古人画半待
画中の画といふはけしきなりハ一昔料紙と書く若多しハ
子ハ一と書くは一畫ハ一画といふハ一とてハ一画といふ
とてハ一と書くは一とてハ一と書くは一とてハ一と書くは
画といふハ一と書くは

しうんがふとせしむるは但此一着の事と云ふは傳はるる
しうんがふとせしむるは但此一着の事と云ふは傳はるる

しうんがふとせしむるは但此一着の事と云ふは傳はるる
しうんがふとせしむるは但此一着の事と云ふは傳はるる
しうんがふとせしむるは但此一着の事と云ふは傳はるる
しうんがふとせしむるは但此一着の事と云ふは傳はるる
しうんがふとせしむるは但此一着の事と云ふは傳はるる
しうんがふとせしむるは但此一着の事と云ふは傳はるる
しうんがふとせしむるは但此一着の事と云ふは傳はるる
しうんがふとせしむるは但此一着の事と云ふは傳はるる
しうんがふとせしむるは但此一着の事と云ふは傳はるる
しうんがふとせしむるは但此一着の事と云ふは傳はるる

凡信之通西釋卷中終

